

◎ローマ法王：神や宗教の名の下の紛争増加—米議会で演説

【毎日新聞、09/25/2015】米国訪問中のフランシスコ・ローマ法王は24日、ローマ法王として初めて米連邦議会上下両院合同会議での演説を行った。法王は人類の「共通の責任」に繰り返し言及し、紛争を悪化させる武器取引の禁止や、難民や移民の保護、貧困者の支援や地球環境の保護などへの取り組みを呼びかけた。

法王は下院本会議場で英語で演説。奴隷解放宣言を行ったリンカーン大統領や人種差別と闘ったキング牧師など米国の歴史的人物に言及しながら「正義と平和」の追求の重要性を説いた。「神や宗教の名の下に犯される紛争、憎しみ、残虐行為が増えている」と原理主義に注意を呼びかけ、「善悪、敵味方と分ける単純な思考」に身を委ねるな、と訴えた。

法王は、世界各地で続く武力紛争終結のためにも武器取引の禁止が必要だと指摘。こうした取引で得られる資金は「罪のない人々の血に浸っている」と述べ、問題に関し「恥ずべき、犯罪的な沈黙」が続いていると批判した。また世界的な死刑廃止を呼びかけた。

さらに米国への欧州からの入植者が現地住民多数を殺害し土地を奪った歴史に間接的に言及。「過去の過ちを繰り返してはならない」として、移民受け入れに関し柔軟な対応を求めた。

欧州に押し寄せている難民については、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」と聖書から引用して人道的対応を求めた。

米国では2016年の大統領選挙を控え、人工妊娠中絶問題への候補者の態度に注目が集まっているが、法王は「人間の生命を、その全ての段階で守るべきだ」と間接的表現にとどめた。

◎カトリック神父が同性愛を公表

【C J C = 東京、10/05/2015】バチカン（ローマ教皇庁）教理省のクシシュトフ・ハラムサ神父（43）が10月3日、自身が同性愛者であることを公表した。

4日から開催される司教会議では同性愛信徒への対応を協議することになっており、直前の公表に、バチカン広報事務所は声明を発表、ハラムサ神父の行動が「司教会議に対するメディアの過度な圧力を誘発するもので、非常に重大で無責任」だと批判した。さらに同神父が教理省やカトリック大学で職務を継続することはできないとの見解を示した。

A F P通信によると、ハラムサ神父は、パートナーであるカタルーニャ人のエドゥ

アルドさんとローマ市内で記者会見し公表した。神父のカラーを着けたハラムサ神父は、性的少数者に対するカトリック教会の姿勢を形成しているのは偽善や妄想であり、声を上げないわけにいかないと言った。

神父は、「同性愛を公言してとても満足している」と述べた。またイタリア語で「沈黙の中で苦しんできたあらゆる性的少数者たちと、その家族の代弁者になりたい」と語ったという。

教皇は9月下旬の訪米中、同性カップルに結婚許可証の発行を拒否した地方公務員とひそかに面会し「気持ちを強く持って」などと励ました一方、同性愛者のかつての教え子と旧交を温めてもいる。

「生への畏敬」

A・シュヴァイツァー『わが生活と思想より』（シュヴァイツァー著作集 2）、白水社、1956年、280頁以下）

A. Schweitzer, *Aus meinem Leben und Denken*, Leipzig, 1931.

「生への畏敬」はその中に、諦念、世界人生肯定、および倫理を含んでいる。これは世界観の相互に関連する三根本要素であって、真の思索が生むべき当然の帰結である。

今日までに、諦念の世界観はあったし、世界人生肯定の世界観も存したし、また倫理的な要求を充たさんとする世界観も存在した。しかし、この三要素を同時に結合しうる世界観はひとつもなかった。この三者が結合されるのはただ「生への畏敬」の概念の中に限るのである。この「生への畏敬」の普遍的信念よりしてのみ、この三者は各その本質に従って了解され、ひとつに統一されたものとして確認され得る。諦念も世界人生肯定も、決して倫理の外に独立に存在するものではない、倫理の一オクターヴ低い同音である。

現実には即した思考より発したゆえに、「生への畏敬」の倫理は現実には即している。そうして人間を絶えず現実には直面せしめる。

一見したところ、「生への畏敬」というのみでは、あまり一般的で切実味がなく、生きた倫理の内容を形づくることが出来ない、ように見えるかもしれぬ。しかし要は、表現が的確で内に生命がもたらされてあればよいのである。表現を効果的に響かしむべく工夫する必要はない。ひとたび人が「生への畏敬」を体得し、その命ずる所に従って生きれば、かつては切実に響かざりしこの表現の中にかなる烈火が炎々としているかを知るのである。「生への畏敬」の倫理は、衆生いっさいに拡充せられた愛の倫理である。これこそイエスの倫理を考究するときの、最後の必然の帰結である。

これに対してなお、自然の生命に対してあまりに価値をおきすぎる、との抗議がある。この非難に対してはこう答えたい、——過去の倫理はすべて、その対象とする生命をそのあるがままに神秘的な価値として認めることをしなかった、これは錯誤である、と。いっさいの自然の生命の中に、精神的生命が発現するのである。ゆえに、「生への畏敬」は、自然的・精神的の両生命に献げられるべきものである。イエスの比喻によれば、牧人はただ迷える羊の霊をのみ救うのではない、その羊すべてを救うのである。自然の生命に対する畏敬の念が強ければ、それに従って、精神的の生命に対する畏敬の念も増すのである。

また、「生への畏敬」の倫理について人が特に奇異とするのは、この思想が、高い生命といやしい生命、価値ある生命と無価値の生命のあいだに何の差別もつけない、というにある。さあ、この無差別にもやはり確乎たる理由がある。

生きとし生けるものの生命のあいだに価値の別を設けるのは、結局、われらの感ずるところに従って、ある生命が人間に近いか遠いか、というに帰着する。すなわち、全然主観的な標準にすぎぬ。他の生物の生命が、それ自身としてまた全世界の中に、いかなる意義をもつものか、——そもそもわれらのなにびとの知るところぞ？

この差別感の結果、世界には無価値の生命もあって、これを毀損したり滅ぼしたりしても差支えない、という思想が生ずる。この無価値の生命といわれるものは、時に応じて、昆虫の種類であったり野蛮人であったりする。

真に倫理的な人間にとっては、あらゆる生命が神聖なものである。われら人間の立場から低級と見えるものすら、しかりである。生命のあいだの差別をつけるのは、必然性によって強制される場合のみである。すなわち、二つの生命のうちいっぽうを救うには、いずれかのいっぽうを犠牲にするの止むを得ない、場合に限るのである。この止むを得ぬ場合の判断をなすにあたって、人間は自主的反省的に決定をする。犠牲となった生命に対する責任をになう、ことを自覚しておらねばならぬ。

私は、嗜眠症剤が新らしく創られたことを実に嬉しく思う。以前は、苦痛に虐まれる病人をただ傍観していなければならなかったのであるが、近頃は、この薬のおかげで病人の命を救うことができるようになった。しかし一度、顕微鏡の下で嗜眠病菌を眺めるときには、人間の生命を救うためにこの細菌を殺さざるを得ないのだ、という感慨をつねに禁じ得ない。

私は土人の残忍な手から救うために、かれらが河床で捕えた若い鶺鴒（みさご）を買い取る。しかしその後、一体この鳥を餓死さすべきか、あるいはこれを生かすために毎日幾匹かの小魚を殺さねばならぬか、に当惑するのである。私は後者をとることに決める。しかし毎日、自分の責任をもって、いっぽうの生命をたもつために他者の生命を奪わねばならぬことを、苦しい事と感ずる。

全生物とひとしく人間もまた、かくのごとき生命の意志の自己分裂の法則にしばられている。人間は常住、他の生命を犠牲にしてはじめて、彼自身の生命をもまた一般の生命をも保ちうる、という窮地に陥る。ひとたび「生への畏敬」の倫理を奉じた以上は、生命を毀ち滅すのは、いかにしてもさけ得ざる必然性からのみで、けっして無思慮からすべきではない。人間が自由人である限り、あらゆる機会を求めて、生命を扶助し苦難と破壊を除く至福に参すべきである。

私は少年時代から動物愛護運動に加わっていた。しばしば単なるセンチメンタリズムにすぎぬ、として軽蔑される動物への同情の念を、倫理的感情として説くことができるのは、歡びに堪えない。「生への畏敬」の普遍的倫理は、この動物への同情を、思索する人間の回避するを得ざるもの、としてしめす。従来倫理は、人間対動物の問題に対しては、無理解であるか、または答えるところを知らなかった。従来倫理の主眼とするところは、人間対人間の関係のみにあった。たとえ動物への同情を正し

いとは感じていても、これを倫理の中に包摂することができなかった。

動物虐待がその骨子となっているようないっさいの民衆の娯楽を、一般に認めなくなるような時代は、いつになったら到来するであろうか！

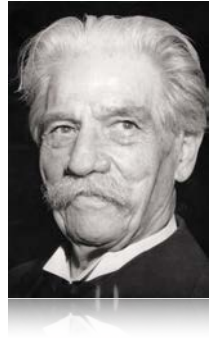
かくて、思惟に根ざした倫理は、けっしていわゆる「常識的に妥当」というべき類のものではない。むしろ理知をこえ熱情に充ちたものである。伶俐に打算された義務、といった範囲のものではない。人間の力におよぶかぎり、すべての生命への責任をおうことを要求し、己をすてて他を助けることを強要する。

世界大戦のただ中から（1）

— A. シュヴァイツァー —

Overview

- ・ シュヴァイツァーの生涯
- ・ 神学思想
- ・ 生への畏敬
- ・ 影響史



生涯

- ・ 1875年 カイザースベルク（1921年までドイツ領）で牧師の長男として生まれる。
- ・ 1896年（21歳） 「わたしは、30歳までは、学問と芸術のために生きよう。それからは、直接、人類に奉仕する道を進もう」。
- ・ 哲学・神学・音楽に専念していく。聖ニコライ教会の副牧師、シュトラスブルク大学神学部の講師となり、また、パイプオルガン奏者としても著名になっていた。



- ・ 1905年 30歳から医学を学ぶ。フランス語版『バツハ』を出版。
- ・ 1906年 『イエス伝研究史』を完成。1908年、ドイツ語版。
- ・ 1912年 大学と教会に辞表を提出。
- ・ 1913年（38歳） ガボンのランバレネに向かう。
- ・ 1914年 第1次世界大戦はじまる。自宅に拘禁される。
- ・ 文化とは何かについて考え始める。現代文化の退廃と、文化再建の道。

- ・ 1915年（40歳） オゴウエ川をさかのぼる途中「生命への畏敬」の理念を考えつく。
- ・ 1917年 フランス本国の捕虜収容所にはいるために、ランバレネを去る。
- ・ 1918年 捕虜交換でドイツに戻る。
- ・ 2万フランもの借金が残る。パリで豪勢に暮らしていたピカソの1ヶ月の生活費が千フランの時代であった。
- ・ 1919年 スウェーデンの大僧正から講演に招かれる。ヨーロッパの各地で講演や演奏をし、大成功を収める。

- ・ 1924年 再びランバレネへ向かう。
- ・ 1926年 内村鑑三、シュヴァイツァーに寄付金を送る。
- ・ 1928年 フランクフルト市よりゲーテ賞を受ける。
- ・ 1931年 『わが生活と思想より』出版。
- ・ 1953年（79歳） ノーベル平和賞受賞。
- ・ 「現代における平和の問題」を講演。
- ・ 1957年 オスロ放送局から原爆実験中止を訴える声明を放送。
- ・ 1965年（90歳） 逝去。

神学思想

史的イエス研究

- ・ 著作
 - ・ 『メシア性の秘密と受難の秘義——イエス小伝』（1901年）
 - ・ 『ライマールスからブレーデまで。イエス伝研究史』（1906年）
 - ・ 『使徒パウロの神秘主義』（1930年）
- ・ 近代的なイエス像を批判
- ・ 19世紀末の宗教思想（特に文化プロテスタンティズム）によれば、イエスは地上において倫理的な神の国を建設しようとした「道徳的教師」であった。

徹底的終末論

- ・ 黙示終末的預言者としてのイエス
- ・ イエスは徹頭徹尾、後期ユダヤ教のメシア待望の中で生きていた。神の国は人の子と共に、超自然的に出現すると期待していた、と理解する。
- ・ イエス神秘主義
- ・ 時代的な制約を受けたイエスを直視しながらも、時代を超えて語りかけ、信仰を呼び起こし、倫理的实践へと駆り立てるイエスを見出そうとする。

生命（生）への畏敬

Ehrfurcht vor dem Leben

- ・「わたしは、生きようとする生命に取り囲まれた生きようとする生命であるという事実」
- ・オーゴウエ河をのぼる船の中で突如思いつく。
- ・「河馬の群の間を船が進んでいったとき、突如、今まで予感もしなければ求めたこともない『生命への畏敬』という言葉がひらめいたのであった。——鉄扉は開けた！ 密林の道は見えてきた！ ついにわたしは、世界・人生肯定と倫理とともに包含される理念に到達したのである！」（『我が生活と思想より』、以下も）

また、「生への畏敬」の倫理について人が特に奇異とするのは、この思想が、高い生命といやしい生命、価値ある生命と無価値の生命のあいだに何の差別もつけない、というにある。さあ、この無差別にもやはり確乎たる理由がある。

生きとし生けるものの生命のあいだに価値の別を設けるのは、結局、われらの感ずるところに従って、ある生命が人間に近いか遠いか、というに帰着する。すなわち、全然主観的な標準にすぎぬ。他の生物の生命が、それ自身としてまた全世界の中に、いかなる意義をもつものか、——そもそもわれらのなにびとの知るところぞ？

この差別感の結果、世界には無価値の生命もあって、これを毀損したり滅ぼしたりしても差支えない、という思想が生ずる。この無価値の生命といわれるものは、時に応じて、昆虫の種類であったり野蠻人であったりする。

私は少年時代から動物愛護運動に加わっていた。しばしば単なるセンチメンタリズムにすぎぬ、として軽蔑される動物への同情の念を、倫理的感情として説くことができるのは、歓びに堪えない。「生への畏敬」の普遍的倫理は、この動物への同情を、思索する人間の回避するを得ざるもの、としてしめす。従来の倫理は、人間対動物の問題に対しては、無理解であるか、または答えるところを知らなかった。従来の倫理の主眼とするところは、人間対人間の関係のみにあった。たとえ動物への同情を正しいとは感じていても、これを倫理の中に包摂することができなかった。

動物虐待がその骨子となっているようないっさいの民衆の娯楽を、一般に認めなくなるような時代は、いつになったら到来するであろうか！

影響史

- ・ 20世紀神学における終末論の再発見
- ・ エコロジー思想・生命倫理への影響
- ・ レイチェル・カーソンの『沈黙の春』（1962年）はシュヴァイツァーに捧げられている。
- ・ 動物福祉（愛護）運動への影響

Albert Schweitzer Stiftung



ÜBER UNS AKTUELL KAMPAGNEN THEMEN DIE TIERE PRESSE HELFEN
Sie sind hier: Start | Aktuell | Jubiläum: Albert Schweitzers Ehrfurcht vor dem Leben

Jubiläum: Albert Schweitzers Ehrfurcht vor dem Leben

Veröffentlicht am 14. Januar 2015, zuletzt aktualisiert am 15. Januar 2015



Heute jährt sich zum 140. Mal der Geburtstag Albert Schweitzers – und das in einem sehr bemerkenswerten Jahr. So steht am 4. September bereits der 50. Todestag des noch heute weltbekanntesten Philosophen, Theologen, Arztes und Musikers an. Hinzu kommt ein ganz besonderes Jubiläum: Im September des Jahres 1915 – d. h. vor nunmehr 100 Jahren – gelang es Albert Schweitzer den für seine Philosophie zentralen, noch heute weithin bekannten Begriff zu finden: die »Ehrfurcht vor dem Leben«.

Denkwürdige Daten genug also, um zum diesjährigen Geburtstag Schweitzers die Entstehung und grundlegenden Aspekte seiner Philosophie noch einmal näher in den Blick zu nehmen und nach

Petitionen für die Tiere

Tragen Sie sich ein und erhalten Sie 1x im Monat Infos zu Petitionen.